

ARTICLE

「あれから10年

——まち全体がキャンパスになりつつある」

「制度を越えてひろがる、生涯学習という文化の風景」

NPO法人シブヤ大学代表理事 左京泰明

はじめに…

学びの風景は、本当に

“縮小”しているのか？

「生涯学習は人も予算も減っていて、なかなか思うように展開できない——」

そんな声を、全国の生涯学習に携わる方々からよく耳にする。確かに、自治体の担当部署に割かれる人員や資源は年々厳しくなり、制度的な枠の中だけを見れば、活動の縮小を実感する現場は少なくない。

しかし一方で、まちなかに“学び”が広がっている光景を、私はいくつも

見てきた。たとえば、福祉や防災、まちづくりといった分野で、市民向けに講座やワークショップを企画する行政の他部署。あるいは、企業人が地域活動にプロボノとして関わるかたち。地域の小さな書店やカフェが対話の場となり、SNSやYouTubeが誰かの学びの起点となる。こうした動きは、「生涯学習」という名前では語られていないかもしれないが、その本質には確かに“学び”がある。

ちなみに私自身、2015年5月号『社会教育』の特集「社会教育のイノベーション」において、“シブヤ大学現象”

と呼ばれる取り組みを通じて、生涯学習の可能性を問い直す寄稿を行った。それから10年が経った今、当時とはまた異なるかたちで、学びは社会の中に静かに広がり続けている。制度の外側で、そして市民の暮らしのなかで、どのような変化が起きてきたのか——あらためてその軌跡をたどってみたい。

本稿では、シブヤ大学の実践を軸にしながら、社会のなかに潜在的に広がっている「まち全体がキャンパス」のような学びの動きを見つめ直してみたい。そこには、制度の枠を超えてなお広がる“生涯学習の精神”が息づい



渋谷区主催「渋谷おとなりサンデー」のひとつコマ。
世代や立場を超えて、まちのなかで自然な対話が生まれる。



笹塚・幡ヶ谷・初台・本町エリアを舞台に展開される「ササハビゼミ」。
世代や立場を超えて、じっくりと話し合い、まちの課題に向き合う。

ているはずだ。

第1節..

制度の枠を超えて——広がる “生涯学習的”なアプローチ

「生涯学習」と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。多くの人がまず想像するのは、行政の教育委員会や生涯学習課が主催する公開講座やワークショップかもしれない。実際、そうした事業

はこれまで地域の学びの基盤を支えてきた。

だが近年、そうした担当課だけでなく、福祉、防災、まちづくり、男女共同参画といった、いわゆる“教育以外の分野”で、市民向けの講座や対話の場が増えている。たとえば高齢者の地域参加を促す福祉分野のワークショップ、防災をテーマにした体験型訓練、地域の魅力を再発見するまち歩き企画

——いずれも、知識を得ることや人とつながること、地域の課題に主体的に関わるきっかけを提供しているという点では、「生涯学習」と呼ぶにふさわしい内容である。

こうした「市民による学びの場」が成立しやすくなった背景には、学習の方法そのものの変化もある。1980年代以降、青少年教育や企業研修の分野でワークショップやファシリテーションの手法が熱心に研究され、1990年代には住民参加型のまちづくりの流れの中で、広く社会に浸透していった。2000年代には参加型学習の方法論がある程度体系化され、教育現場や行政事業のみならず、一般市民のあいだでも活用されるようになっていく。その結果、従来は専門職や教育者に限られていた進行技術や対話の設計が、地域の日常的な場にまで広がり、学びの場のあり方そのものが更新されたといえる。

また、行政だけでなく、企業人がプロボノとして地域活動に関わる事例も

増えている。社会人が仕事のスキルや経験を活かしながら、地域のNPOや自治体と協働する中で、自分の知らない世界に触れ、学び直しの機会を得ている。これもまた、知識の獲得にとどまらない、学びと実践の往復である。

こうした現象は、制度としての「生涯学習」が縮小しているように見える一方で、そのエッセンスが他の分野に滲み出し、むしろ拡張していることを示している。担当課という枠組みの中だけを見ては気づきにくいのが、実際には「生涯学習的な場」は広がっているのだ。

シブヤ大学と渋谷区の協働の中でも、教育以外の部局と連携した「学びの場づくり」が進んでいる。たとえば地域振興課が主催する「渋谷おとなりサンデー」は、“近所さん”とのゆるやかなつながりを促進する、年に一度の地域交流イベントである。シブヤ大学はこの取り組みに企画段階から参画し、まちの中で偶然的な出会いが生まれる

ような仕掛けや、つながりの原体験となるような機会が生まれるプラットフォームをつくってきた。福祉や地域振興といった文脈から立ち上がった事業ではあるが、その根底には、暮らしのなかに学びやつながりを生み出す「生涯学習的な視点」が息づいている。また、2024年に始まった「ササハピゼミ」は、渋谷区の笹塚・幡ヶ谷・初台・本町エリアにおける暮らしの質やまちの魅力を高める「ササハタハツまちラボ」による住民主体のゼミ型プログラムである。住民の関心から立ち上がったテーマをもとに、継続的な対話や実践を重ねていくこの取り組みも、形式上は行政事業の一環ではないが、「地域に根ざした学びとつながり」の体現と言える。

生涯学習の営みが、多様な分野にひろがり、社会のあちこちで実践されている。名前は違っても、それは「まち全体がキャンパスになりつつある」ことの、何よりの証拠ではないだろうか。

第2節..

暮らしのなかにある学び

— 制度に頼らない学習文化

「学び」とは、制度に用意された場所では起きないものだろうか。必ずしもそうではない。むしろ近年、制度に依存しないかたちで、暮らしのなかに自然に根づいた「学びの文化」が、静かに広がりつつある。

たとえば、全国各地で注目を集めている独立系の小さな書店。そこでは本を売るだけでなく、著者を招いたトークイベントや読書会、テーマを決めた語り合いの場が日常的に開かれている。ある書店では「ケアと対話」をテーマにしたシリーズ講座が行われ、また別の地域ではZINE制作を通じて「自分の声を発する」ワークショップが続けられている。これらは決して教育委員会の主催でも、補助金の事業でもない。だが、そこで生まれている「知の交換」や「他者と出会う場」は、まさに生涯学習そのものである。

カフェやコミュニティスペースもまた、同じように「学びの場」として機能している。コーヒー片手に、地域の課題をテーマに語り合ったり、日常のモヤモヤを話し合ったりする。こうした場の多くは、学ぶための「正解」を提供するのではなく、問いや違和感を持ち寄る「プロセスとしての学び」を重視している。

インターネット上でも、そうした学びの風景は広がっている。YouTubeやPodcast、SNSを通じて、誰かが誰かの語りに出会い、思わぬテーマに引き込まれていく。コメント欄やリアルイベントでつながりが生まれ、そこから学びが続いていく例も多い。情報量が多すぎる時代と言われるが、自分の関心を深める「学びのツール」としてネットを活用している人も少なくない。

一方で、特に若い世代にとって、SNSは情報を得る場所であると同時に、安心して対話を交わすにはハードルの高い空間でもある。炎上や非難を恐れ

たり、身近な人間関係に影響を及ぼすことを懸念したりして、社会的なテーマについて本音を語ることが難しいと感じている人も多い。結果として、深く考えることや他者と立場を越えて語り合う機会が、かえって乏しくなっている現状がある。

そうした時代において、シブヤ大学は「自分たちの社会について安心して話せる場」をつくることを、自らの重要な役割のひとつと捉えている。SNSのように発信が即座に可視化されるのではなく、匿名でもなく、顔の見える少人数で、互いの背景や思いを尊重しながら言葉を交わせる「リアルな対話の場」。それは、「声をあげることができない」時代にこそ必要な、もうひとつの学びのインフラである。

私たちが「生涯学習」という言葉で捉えてきたものは、今、まちのあちこちに、そしてオンラインの空間にも自然に広がりはじめている。その広がりを目を向ければ、学びはもはや「場所」や「制度」に閉じたものではないと実

感する。生涯学習が文化となり、暮らしの風景の一部になっているのだ。

第3節..

国を越えた学び合いと

シブヤ大学の実践

制度や場所を超えて学びが広がる今、国境さえもまた、学びの壁ではなくなりつつある。シブヤ大学でも、近年は海外の市民大学や学びの実践者たちとつながる機会が増えてきた。

そのひとつが、韓国の市民学習団体「カンファユニバース (Ganghwa Universe)」との交流である。彼らが展開するプログラム「잠시섬 (チャムシム)」は、直訳すると「しばしの間 (立ち止まる) 島」という意味であり、日常の時間と情報の流れから少し離れ、自分自身や他者と静かに向き合うための学びの場である。スマートフォンを手放し、自然の中で身体を動かしたり、対話を通じて心を整える。そこには「速く・効率的に・成果を出す」ことが求められる現代社会への静かな問いかけがある。



イタリア・アレクサンドリアにある市民の拠点
「Casa di Quartiere」の内観。地域住民が自由に集い、
語り合い、活動を生み出す場となっている。

このアプローチは、情報過多や成果主義によって精神的に疲弊しがちな都市生活者にとって大きなヒントとなる。シブヤ大学では、この「잠시집（チャムシム）」の考え方に共感し、同様のテーマで授業やプログラムを展開することも検討している。国は違えども、共有できる感覚や問いは多く、それが新たな学びの着火点になる。

また、イタリアのアレクサンドリア市にある「Casa di Quartiere（地区の家）」とも、実践の学び合いを行っている。かつての鋳物工場の倉庫を再生したこの場では、福祉・文化・教育・居場所支援といった複数の目的が緩やかに交差し、市民が自由に行き来しながら関わっている。ここでは「教える・学ぶ」という関係を超えて、人と人が対話し、ケアし合う日常のなかにこそ、持続可能な学びがあるという価値観が根づいている。

シブヤ大学がそうした国際的なつながりを持てるのは、NPOという柔軟な組織形態と、「まち全体がキャンパス

である」という根本理念を共有できる仲間が世界に存在しているからである。むしろ、「市民大学」のような柔らかな枠組みだからこそ、国や制度のちがいに縛られず、学びの本質を共に探ることができる。ここである「市民大学」とは、いわゆる行政主催の市民講座を指すものではなく、行政と関係があるか否かを問わず、市民自身が学び合いをつくり出す場を指している。シブヤ大学の場合は、「まち全体がキャンパス（場所の無制限性）」「誰もが講師であり受講生（非権威主義）」「参加は無料もしくは廉価（公共性の高さ）」といった理念を掲げ、閉じない学びの公開性を重視してきた。こうした「新しい市民大学」の価値観に共鳴する人々が、国を越えて少しずつつながり始めている。

こうした国境を越えた実践の学び合いは、決して特別なものではない。問いを共有し、対話を続ける意志さえあれば、どこにいても、誰とでも学び合うことは可能だということを教えてくれる。そこにあるのは、「教える・教わる」ではなく、「ともに考え、ともに感じ、

ともに生きる」ための学びである。

おわりに…

学びの再定義——減少ではなく、

変化と拡張として

「生涯学習は減っている」——その言葉の背景にあるのは、制度的な事業数や予算、担当者数といった「目に見える」資源の減少である。確かにそれは事実かもしれない。だが、そうした枠組みの外側に目を向けたとき、私たちはまったく別の風景に出会う。

地域のなかで、カフェや書店が「語り合いの場」となっている。企業人が週末にまちの活動に参加し、市民が自ら学びの場を立ち上げている。インター

ネットの中には、誰かの語りに触れ、思わぬ問いを得る小さなきっかけが転がっている。そして、国境を越えて、似た価値観や問いを持つ仲間と出会い、実践を学び合う場もある。

それらは、必ずしも「生涯学習」と名乗ってはいないかもしれない。だがそこには、自分のペースで問いを深め、他者と出会い、社会とつながり直す「学び」の本質がある。言い換えれば、「生涯学習」という言葉に閉じ込められてきた学びが、今、社会の中に静かに染み出して、暮らしの文化として広がっているのだ。

私たちはいま、学びの「定義」を少し変えるタイミングに来ているのかも

しれない。生涯学習は、制度や枠組みの中だけにあるものではなくなった。むしろその精神——すべての人が、自分の問いを持ち続け、他者と共に考え、よりよく生きていく力を育む営み——は、社会のさまざまな場面で確かに息づいている。

「まち全体がキャンパス」という理念は、もはや比喩ではない。制度を越え、部署を越え、国境さえ越えて、学びは静かに、そして確実にひろがっている。生涯学習に関わるすべての人が、その変化を恐れるのではなく、新しい可能性として受けとめ、再び学びの風を起こしていけるように——そんな願いを込めて、私はこの文章を結びたい。



左京泰明
(さきょう やすあき)

早稲田大学卒業後、住友商事を経て NPO 活動へ転身。2006 年に NPO 法人シブヤ大学を設立、代表理事に就任。街をキャンパスに見立て、生涯学習やまちづくり活動を展開する。2017 年には非営利組織の経営支援を行うマネージング・ノンプロフィットを設立、代表理事を務める。「笹塚十号のいえ」等の地域福祉拠点づくりに関与し、行政の「隙間」を埋める「準公共」の場の実現を目指している。渋谷を拠点に社会課題解決のモデルを生み出し他地域へ波及させることを図る。